柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 168 号

かわさきの郷土史を読む　8

伊藤葦天著『川崎新風物詩』・『川崎風土記』（その4）

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員　新井　悟

伊藤葦天氏の二著の中から、中世の城跡の話をする前の閑話休題2話目。麻生区に関係する河童の話です。『川崎風土記』の中から、「河童の手形」（同書 31-33 頁）を紹介します。

『河童の手形』

岡上から上麻生あたりの鶴見川の河童の話です。舞台の紹介。「鶴見川はおよそくねくね曲がっていて、岡上の丘の麓を流れる辺では十間と真直ぐな流れはなくまるでみみずのようにぐるぐると曲りが四十八あったので里のものは四十八瀞（よ）と称んだ。それは曲るたんびに深くとろがあったのである。」と（振り仮名、筆者）。この四十八瀞には、それぞれ四十八家の河童の家族が住んでいました。お互いに嫁聟のやり取りをしていたといいます。瀞には名前がついていたようで、樋下瀞の河太郎と大曲瀞の皿子とが結婚することになったことから、事件が始まります。

樋下瀞の河太郎の家では、結婚の準備で大変です。「その祝いの酒盛りにどうしても尻子玉を供えて御馳走しなければならない。だから嫁取りの前には、ぜひとも尻子玉を抜いて溜めておくのである。」という。尻子玉とは、正体不明ですが、抜かれると人でも動物でも死んでしまうことから、魂の一種でしょうか。その所在は、体内の尻にある。抜かれたものは、尻の穴がぽかんと開いてしまう。迷惑千万な話です。

さて、尻子玉集めがはじまります。人だけでは足りません。目をつけたのは馬の尻子玉です。ちょうど東光院の寺男が馬を洗いにきたので、瀞の深みに河童が集まってきます。「すると寺男が煙草入れを取りに行ったので、この時とばかりに河童のひとりが馬の手綱を取って深みに引込んだ。外の河童が大勢かかって、馬の前足へかじりついたから、馬は後足だけでは泳げず遂に首が水に沈んだ。馬というものは、耳に水が入ると忽ち死んでしまうものである。それを河童はちゃんと知っているのである。馬の尻子玉は子供の二十倍位、大人の十倍はある。」と。

「樋下瀞の河童の家ではこれで相当の客を御馳走することができるようになって喜んだ。河童の世も人間と同じで慾には慾が出るもので、四十八瀞の河童を残らず招くにはまだ少し尻子玉が足らない、出来るならもう一匹の馬のが欲しいものだと、河太郎の親河童は思った。」。つぎに目を付けたのは、常安寺の馬である。親河童は、皿子の家でも欲しかろうと、両家相揃っての尻子玉どりとなった。瀞の深みにひそんでいたところに、寺男が馬を川瀬にひいてきた。河童たちが動き出す。「常安寺の和尚は若い時草角力を取ったりした大入道で力が強かった。和尚はこのあいだ東光院で馬の尻子玉をぬかれた話をきいているし、四十八瀞の河童のけんぞくがひどく殖えて、いろんないたずらをするとの噂が高いから若しやと思って」、寺男の後ろからついてきた。河童は、普通の人の眼にはみえないという。「和尚は真言秘密の法を取得していたのでその河童等がよく見えた」。「これは大変と和尚はすぐに素裸になって瀬に飛び下り、後ろで采配を振っていた大河童の後ろ首筋をむんずと掴まえた。」と。

あとの委細は本文をご覧いただきたいのですが、この時に助命懇願をした河童に詫証文を書かせたといわれています。現在の鶴見川は河川改修されてコンクリートで護岸されていますが、これはまだ川と里との関係が濃密で、異界もまだ近くにあった時代の話です。

ご興味がある方のために、川崎市立図書館の蔵書をご紹介します。『川崎新風物詩』は、川崎、中原、高津、多摩、柿生の各図書館に所蔵されています。柿生には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています。『川崎風土記』は、川崎、幸、中原、高津、多摩、麻生の各図書館に所蔵されています。高津・多摩には貸出用がありますが、ほかは貸出禁止となっています。（2022（令和4）年 1 月４日時点）。なお伊藤氏には多くの著作があります。このうち、川崎市立図書館に所蔵されているものをご紹介しておきます。郷土史関係の著書には、『稲毛三郎重成と桝形城址』（1955）、『掘出した伝永徳の屏風』（1956）、『中野島開発記』（1957）、『稲毛郷土史』（1970）があります。さらに文学関係の著作として、『六月之旅』（1965）、『葦天随筆集』（1969）、『穂　－伊藤葦天句集－』『多麻滸　－伊藤葦天第二句集－』（1971）、『多麻滸以後　－伊藤葦天遺句集－』（1975）ほかが所蔵されています。

参考文献

伊藤葦天　1958『川崎新風物詩』 かわさき新報社
伊藤葦天　1963『川崎風土記』 川崎新聞社

大地に刻まれた
歴史探勝　５

弥生期の竪穴住まいは、丸柱・角柱、そして五平柱で支えられていた

村田 文夫(日本考古学協会会員)

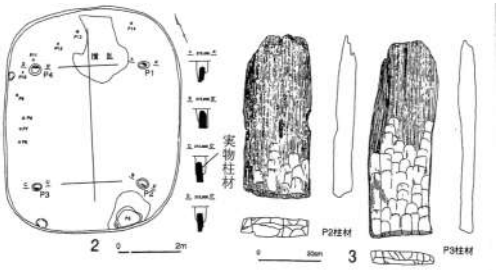
皆さんは復元展示された弥生時代の竪穴住まい内に入った経験はありますか。屋根の重さを支える「主柱」は円形をした丸柱でしたか。遺跡からは「五平柱」？が発掘されています。

竪穴住まいの屋根を支える柱は「丸柱」。この常識に疑問を投げかける発掘事例

今回テーマにした弥生期の「五平柱」の存在にわたしが気付いたのは、昭和 45 年(1970)に報告された、川崎市域と地続きの横浜市港北区中里遺跡が始めてでした。竪穴の四隅に掘られている柱穴の平面形が、丸柱を据える「円形」でなく、長辺×短辺の長さが 100×23 cm という「超長方形」でした。これでは、到底「丸柱」は据えつけられないな？

でも、わたしは「扁平柱」の実物報告は知らないので、黙っていた。すると山梨県の境沢遺跡に「扁平柱」の実物報告があった。それは鉄斧で仕上げた削り痕も鮮やかな扁平柱(第 1 図)。遺跡が笛吹川の扇状地に近接し、伏流水で木材が保護されてきた。これでよし!!。竪穴床面に掘られた柱穴の平面形と、実際に建てた柱のカタチは一致した。断じて「丸柱」ではないぞ。

日本民家園で同僚であった三輪修三さんにこの話をしたら、建造物では柱の長辺×短辺の比率が２対１の場合、「五平柱」(ごひらばしら)と呼ぶとのこと。御教示を受けて、わたしは弥生時代の「五平柱」論を何回か書き、ようやく「五平柱」の名称は定着してきました。



(第1図)山梨県境沢遺跡の住居と五平柱

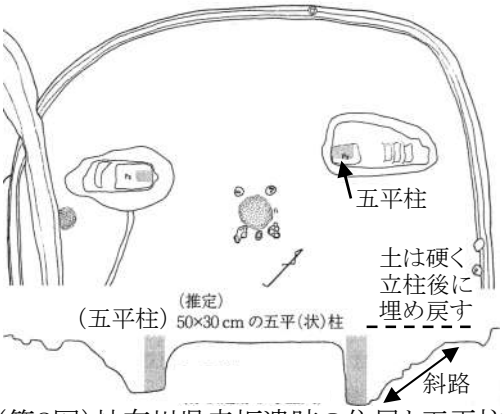
五平状の柱を据えた竪穴住まいには顕著な特徴があった

発掘された「五平柱」を据えた住まいには、共通する顕著な特徴がありました。

1.「五平柱」を据えた竪穴住まいは、ほぼ例外なく、発掘された集落内では面積が広い、いわゆる大形住居跡に顕著に偏向していました。この事実は重要である。

2. 建築された時期も極めて限定的。弥生時代前期・中期・後期のうち、出現・隆盛したのは、中期半ばから終末期まで。何故か、古墳時代初頭期には一斉に姿を消しています。

3.「五平柱」の実物資料などが確認できる事例は山梨・長野・群馬・神奈川県に多く、柱穴形状から推測される事例を含めても、埼玉・東京・千葉などで、何故か限定的である。



(第2図)神奈川県赤坂遺跡の住居と五平柱

＊

では、超大形の竪穴住まいは、どのように設計されてきたのか、具体例でみてみよう。

神奈川県三浦市の赤坂遺跡５号住まい(弥生中期・宮ノ台期)。この竪穴は、超デカイ(第２図)。長辺 15m×短辺 12.2m。床面に掘られた 4 本の主柱穴は、長辺の平均 3.3m×短辺の平均 1.9m、深さは床面から 1.6m。柱を直接据える柱穴の底面は、長辺の平均 1m×短辺の平均 60cm。仮に柱が、柱穴底面サイズの半分でも、 50×30cm 前後の大きさになる。大形の柱を建てる時には〝斜路〟を設けた。斜路を利用して壁際から立柱し、後は埋め戻した。

では、何故必要以上に堅牢な家に居住したのか？ わたしは、当該の竪穴に居住した一族の家長は、集落の内・外に自己のチカラを誇示したかったのであろうと考えている。舶来の鉄斧で仕上げた〝五平〟の四本柱は黒く煤け、村中・村外の人々を十分に威圧できたのであろう。

ところが弥生時代後期、それも終末期になると、家々の規模は一斉に小型化し、ましてや「五平柱」を据えた家はほぼ皆無。ここで推測を逞しくすると、古墳時代に入る前に清算させられた？。その好例が、高津区長尾台北遺跡の7号竪穴(弥生後期)。「五平柱」を据えていた柱穴を廃棄し、その隣に「丸柱」用の円形穴を新規に掘っていた。外からの圧力がかかったか？

「五平柱」研究を総括すれば、弥生ムラのなかで権勢を握っていたグループがいた。が、所詮はスモール・ボス。背後のビック・ボスはスモール・ボスを配下にし、「五平柱」などの特権意識を完全に剥奪した。その彼等のお墓が、次代の前方後円墳であろう。たかが「柱穴」、されど「柱穴」である。背後には、歴史的な大転換が予兆されていた。これ、少し勘ぐりすぎですかね。

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育（24）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

義務教育期間の延長

義務教育期間の延長に伴う教育内容の拡充については、長野県の五加小学校が苦心して編纂した『五加小学校百年史』や東京都の田無市が編纂した『田無市史』に収録された田無小学校の記録が、当時の教育内容を具体的に示す貴重な史料となっています。当時の学校歴では、節目となる進級や卒業に際しては、必ず小試験（学期末試験）や大試験（進級試験と卒業試験）が、県や府指定の一斉試験として行われていました。そうした試験の代表的な設問例が記されているのです。それによりますと、基礎的な学力を問う問題や天皇制国家観を問う問題と並んで、脱亜入欧(＝アジアの国々を見下し、欧米諸国の仲間入りを果たそうとする考え方）の世界観が問われ、また四民平等についての学びが含まれていたことが読みとれます。理科教育についてみると、地層の成り立ちや音の伝わり方まで、幅広い学習が行われていたことが分かります。

『田無市史』全４巻
のうち第３巻

こうして、19世紀の末から20世紀初頭にかけて、当時の師範学校出身の教師たちが、フランスでは共和国の伝道師の役割を担っていたのに対し、天皇制の伝道師の役割を担っていたことが分かります。教育は次代の担い手を育成する大切な手段であることは紛れもない事実です。それゆえ、教育は国家権力や社会の要請から強い影響を受けることは当然で、この事実は否定できるものではありません。しかしまた、努力家で優秀な教師たちが、単なるティーチングマシンに留まることを良しとせず、学級共同体の構成員たる生徒たちに働きかけ、一種独特な日本独自の精神共同体を作ってきたことも、また事実だったのです。

義務教育における男女差別

こうして日本の義務教育も普及期に入ったのですが、教育機会の男女差別はなお厳然と残っていました。4年間の教育については、男女の就学率の差は、殆ど目立たなくなってなっていたのですが、4年間の義務教育を終えて、高等科へ進学するとなると話は別でした。義務教育期間が2年間延びて6年間に延ばされても、高等科の教室を併設している小学校は地域に1校程度しかないのが、全国の85％強を占める農村地帯の実情でした。男の子はともかく、女の子がわざわざ遠くの學校まで長い時間をかけて通う必要はない。こうした親の判断で、通学を許可して貰えない女の子が、現実には多かったのです。

向学心に燃えながら、家族の反対で4年生までの通学しか許可されず、義務教育化された後半の2年間の学業を続けられずに中退を余儀なくされた女子生徒が大勢いたのです。いくつか例を記します。大正2年（1913年）に山梨県中巨摩郡落合村に生まれた海野はる子は、4年終了後に後半2年間の通学を熱望したのですが、「貧しい我が家に、余分な教育は必要ない。早く出稼ぎに出るべきだ。」とする兄の強い反対で進級を断念させられ、悔しい思いをしたと語っています。

> 豊年を　騒いでみても　五反八畝
> 夫病んで　男勝りは　ものさびし
> いてほしい　人を返した　朝の雪

後年生活派の川柳作家として知られ、昭和 39 年（1964 年）に 54 歳で没した笹本英子の句

明治43年（1910年）に鳥取県の自作農の家に生まれた笹本英子の例は、海野はる子とはまた違った障害があったことを示してくれます。英子の実家は自作農でしたから、家族の暮らし向きが通学拒否の理由にはなりません。彼女は、「男の子には教育が大事だが、女の子は仕立物を習ったり、機を織ったりして、まめに働きさえすればよい」という、祖母の一言で進学を認めてもらえず、やはり断念に追い込まれています。東京田無市の『田無市史』によれば、明治44年（1911年）の小学校5年生の生徒数は、男の子43人に対し、女の子は24人と、女子は男子の半数近くしか通学していなかったことが分かります。女子生徒の半数近くは、4年終了時点で中退を余儀なくされていたのです。女性が勉強を続けることに対しては、父や兄といった男性ばかりでなく、母や祖母といった家庭内の女性たちの理解も得にくい時代が、なお根強く続いていたのです。

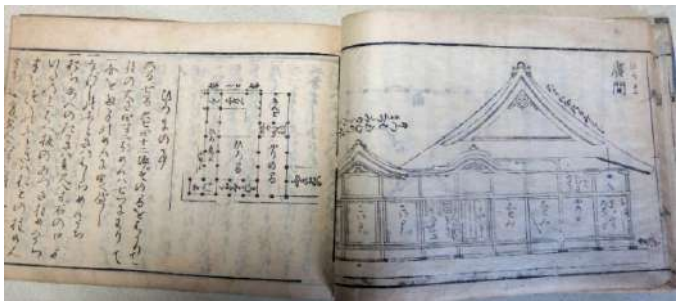
女性の教育要求は、長く不当な扱いを受け続けていたのですが、それでも明治33年（1900年）創設の津田英学塾（現在の津田塾大学）や、明治34年（1901年）創立の日本女子大学校など、よりハイレヴェルな教育を熱望する女性たちに向けた高等教育機関も誕生しつつありました。　（続く）

柿生・岡上の地域文化財

岡上(4)　鳥海家文書・大工道具

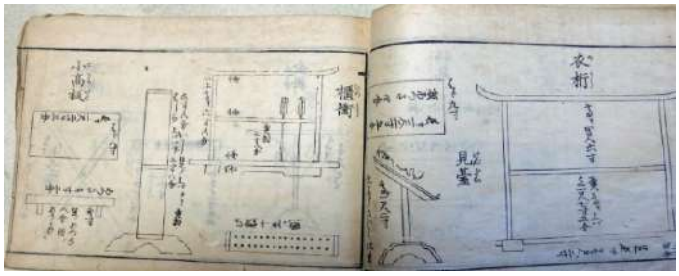
岡上に親しむ会（郷土誌会）

鳥海家は江戸時代から5代続く大工です。家には、文化5年(1808)の『匠家雛形故実録』、嘉永3年(1850)の『雑工雛形』、嘉永4年(1851)の『新撰早引匠家雛形』、安政2年(1855)の『新撰絵様建具雛形』、発行日不明の『独稽古隅矩雛形』、『数寄屋雛形』、『武家雛形』、『宮雛形』、『雑工雛形』、『小坪規矩』、『新編拾遺大工規矩尺集』など、江戸時代に発行された建屋、建具などの見本集が保存されています。



武家雛形

また、日時、方位等の吉凶や禁忌等を解説した『三国相伝陰陽輻轄簠簋内伝金烏玉兎集』から家を建てる場所の良し悪しに関する部分を抜き書きした寛政4年(1792)2月付の『輻轄簠簋書抜写』も残されています。



小坪規矩

さらに、文久2年(1862)の土蔵建築の注文書『土蔵壱ケ所新規建仕様注文』、同年の東光院本堂の修理の注文書『御本堂修復仕様注文』、元治元年（1864）の高札場新設の注文書『御高札場壱ケ所新規建仕様注文』などの書類も残されています。高札場の注文では、屋根、井垣、土台の材質・寸法が細かく規定されており、代金は5両3分2朱と銀3匁となっています。新築された土蔵は宮野家に残っており、高札場は昭和 42 年に生田緑地の日本民家園に移築されました。

輻轄簠簋書抜写

御高札場壱ケ所
新規建仕様

鳥海家の床の間には、柄香炉を持った聖徳太子像の掛け軸と太子の木像が飾られており、大工の守護神として大事に祀られてきました。なお太子の木像は綺麗にしようと水洗いしたため色落ちしてしまったとのことです。

各種大工道具も数多く残されており、鋸（のこぎり）、鑿（のみ）、鉋（かんな）などのほか、今では使うことも少なくなった手斧（ちょうな）、墨壺、割罫引（わりけびき）、丸鉋（まるかんな）などの道具も大切に保管されています。

柿生郷土史料館催物案内【参加自由、入場無料】

◎開　館　日：5月 8・22 日（毎日曜日）　6月 12・19・26 日（毎土曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時（緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。セミナーも再々延期です。）

【お知らせ】第84回カルチャーセミナー「秩父流平氏　畠山重忠と稲毛重成～その鉄並びに杉山神社とのかかわりを追う～」は新型コロナウイルス感染症が落ち着くまで、延期させていただきます。